

早春の京都吟行会

平成十七年二月五日、六日

春耕関西支部新年俳句大会に出席して
会場 京都ザ・パレスサイドホテル

祇園

市原野小町寺

鞍馬

貴船

上賀茂



堀川河畔 吉井勇「かにかく歌碑」

かにかくに祇園はこひし寝るときも
枕の下を水のながるる 勇

京都ザ・パレスサイドホテルで新年俳句大会を
済ませて後によるの祇園散策になった。曇混じり
の寒さはいかにも京都らしい。
八坂神社から東山の料亭街を歩いて堀川河畔の
吉井勇歌碑まで約一時間の散策。凍えるような体
を居酒屋「かつぱ」で暖める。

春寒祇園

暮目良雨

踊り子の波の手振りも春めきぬ
胸に抱く鈴の緒太し春の闇
こつぼりの鈴の音に春立ちにけり
猫の恋八坂の宮の裏の闇
夜半の春祇園の路地を通りけり
一力の塀の高さに春の星
春の雪一力茶屋の犬矢來
祇園たのしリウスちらと見ほらと見ゆ
かにかくに祇園はたのし春の宵
鍵膳の菓子箱の朱やあたたかし
堀川
かにかくに紅燈写す春の水
かにかくの碑に芽柳の夜の影

ザ・パレスサイドホテルに戻った後で有志でまた句会。

コンパスといふ落中のバーあたたかし

翌日二月六日は小型バス二台で鞍馬・貴船・上賀茂へ吟行に出かける。



花見小路「居酒屋かつぱ」で力さん



吉井勇「かにかく歌碑」前で日野の連衆

市原野（左京区）補陀落寺

小野小町終焉の寺と伝えられる。小町の髑（しゃれこうべ）の目の穴からスキが生えたといわれる穴目の薄。小町化粧の姿見の井戸。百夜通いの深草少将の塚。小町像は三尺ほどの厨子に納められているが胸をただけて肋が見える瘦せよう。

絡み合ふ檜の幹や春の雪
小町寺檜の花粉飛ばさざり
姿見の井は苔なせる春の雪
胸薄き小町の像や春火鉢



あばらの見える
小町像



小町姿見の井戸

鞍馬



小町寺から鞍馬の山並みを見る

鞍馬川を遡ると鞍馬神社の山門に着く。道をさら
に行くくと鞍馬温泉がある。
山門からケーブルカーで上り多宝塔駅からさらに
参道を十五分ほど歩く。春の雪で滑りやすい道だ。



鞍馬寺 春の雪景色

牛若の育ちし寺の雪まろげ
雪代の韋駄天ばしり鞍馬川
ものの芽を解きほぐしゐし鞍馬山
雪解雫滝のごとくに鞍馬口



壮大な鞍馬寺山門





由岐神社神木が中央に見える門



由岐神社の火祭り松明



貴船神社の水占。あぶり出しのように文字が浮き上がる

金堂から貴船への尾根道沿いに「牛若丸の息継ぎの水、脊比べ石の他に与謝野晶子の冬柏亭が東京から移築されてある。

由岐（ゆき）神社

鞍馬寺からの下りは雪道の葛籠折れの参道を苦勞しながら降りる。途中に「鞍馬の火祭」有名な由岐神社がある。毎年十月二十二日に行われるこの祭はこの由岐神社の例祭である。

貴船神社

貴船は鴨川の水源地であり貴船神社には水の神様が祀られてある。
和泉式部が願掛けに京の町からここまで通うとは昔の人の凄いとこである。神社よりさらに上ると十分ほどの山中に式部の歌碑がある。

貴船神社より上流の中宮にある
和泉式部の歌碑。



貴船川に迫り出す左側の料理屋から
右の対岸に川床を伸ばす。

水占の大方は吉山笑ふ
水占の濡れ紙に降る春の雪
雪代の澄みて貴船を過りけり

上賀茂神社

上賀茂神社に戻ってくる。京の葵祭はここの祭。広大な神域に圧倒される。神域に隣り合って神職の社家町が形成されている。この寒さのせいかな深閑としたたたずまいである。芝焼きを済ませたばかりの末黒野が瑞々しい。

神馬舎には白馬が一頭参詣客に餌をねだっている。アルミ小皿一枚に人参のスライスが十五枚ほどあって百円の奉納。

舞殿前に一对の立砂（たてずな）が配置されている。神社後方2kmにあるご神体の神山（こうやま）を象って据えられたもの。一点の欠けも見られない手入れに感心する。



上賀茂神社の紋は二つ葉葵だそうだ。力さんが裨宜さんと話されていて帯の結び方から、皇道館系の方が奉仕されているとか。



左上 競べ馬の参道の両側は末黒の芝。右上 参道。
左下 立砂 。 右下 餌を欲する神馬。



神社を出て西にある焼き餅の「神馬堂」一度に40個しか焼かないので行列が出来やすい。

風花の舞ひこむ賀茂の焼餅屋
料峭や尖りしものに神宿り
末黒野の神馬は白を尽くしけり
末黒野に神馬は兒を向けにけり
賀茂神馬馬柵を噛みつつ春を待つ
濡れ髪のように酢茎の葉のありぬ
立砂の尖りしところ冴返る
水温む櫛の小川に山映り（以上良雨句）



上賀茂神社神殿前で東京と関西の仲間

吟行記録抜粋 句は良雨作

(本資料は朝妻力氏のデータを整理したものですが省略した部分がありますのでご承
知おきください。) 写真は墓目良雨撮影。

祇園界限

八坂神社↓東大路通り界限↓安井金比羅宮
↓花見小路界限↓白川南通り

恋の猫よぎる祇園の石畳	深川知子
蠟梅の匂ふ祇園の細小路	阿波谷和子
紅殻の色濃き茶屋の春灯	木村てる代
笛の音や八坂の宮に残る雪	朝妻 力
縁切石形代重ね臈かな	藤野 濤子
くし塚の土こもりと風二月	渡辺 政子
春興に縁切石をくぐりけり	棚山 波朗
春立ちし水のさやげる勇の碑	石鍋みさ代
二ん月の夜風やさしき祇園かな	渡辺 政子

くし塚の円きに触るる春の闇	沢	ふみ江
寒明けの星一力の屋根の上に	棚山	波朗
春浅し闇に沈みし櫛の塚	足立	登美子
春宵の祇園の路地に下駄の音	児玉	真知子
春宵の縁切石をくぐりけり	升本	栄子
提灯の艶めく八坂春寒し	皆川	節子
一力へ急ぐ舞妓や春隣	塚本	清
白川の堰の匂へる柳の芽	武田	孝子
猫の恋八坂の裏に真闇あり	墓目	良雨
うかれ猫祇園の路地にまよひこむ	奈良	英子
春しぐれ御所の暗闇底知れず	武田	禅次
春の夜の白川照らす町屋の灯	児玉	真知子
かにかくに紅燈写る春の水	墓目	良雨
立春大吉社頭にひびく神の鈴	荒川	優子
とにかくに歌碑に合ひしや春の宵	高鴨	良子
こつぼりの鈴の音ゆかし春灯	中川	晴美
春立ちて祇園の復習太鼓かな	朝妻	力
櫛塚のまろみの淡く春立てり	山城	やえ
一力の門燈蔭より猫の恋	石鍋	みさ代
春寒の路地抜けて来し祇園歌碑	生江	通子
立春大吉京の小路の細格子	久重	サヨ子
春宵の祇園に聞きし京言葉	荒川	優子

春燈一力茶屋の細格子	足立	登美子
春燈や舞妓を乗せし人力車	大橋	克己
奥灯る花見小路の春の闇	武田	孝子
浅春の夜風にしむお櫛塚	高鴨	アヤ子
立春の灯に高張のゆらぎかな	生江	通子
小町寺		
姿見の井戸へ吸はるる春の雪	高鴨	アヤ子
春の雪踏んで佛の膝下まで	棚山	波朗
小町像祀るお堂の春火鉢	荒川	優
子		
底浅き小町の井戸や春落葉	升本	栄子
風花やむかしを今に小町寺	杉江	茂義
姿見の水涸れてゐる小町の井	山崎	羅春
料峭の指細かりし小町像	武田	孝子
照り昷る小町の塚の冬りんご	升本	栄子
楊柳の観音像や春の雪	皆川	節子
苔厚き姿見の井や春の雪	足立	登美子
残雪の磴踏み小町の井戸を見に	山崎	羅春

鞍馬

浅春の風まだ固き鞍馬山
石積みの苔にしづれる春の雪
杉間より雪解靄立つ鞍馬山
義経の息つぎ水の温みけり
降る雪に法鼓昂ぶる鞍馬寺
閑伽井汲む鞍馬に雪のしづる音
雪鞍馬朱の万燈の九十九折
風花の鞍馬の杉を越えゆけり
鞍馬路の走り根つたふ雪解かな
牛若の背くらべ石や松筆鳥
牛若の育ちし寺の雪まろげ
鞍馬なる金剛界の春の雪
雪晴の比叡を望む鞍馬かな
雪解風法鼓とどろく鞍馬山
春の雪解けて鞍馬山の彩生るる
春の雪鞍馬の山を包みけり
背比べ石磴の深みに笹子鳴く
牛若を育てし木立垂り雪
牛若の修行の山や春あられ

高井美智子
武田 禅次
児玉真知子
渡辺 政子
沢 ふみ江
中川 晴美
石鍋みさ代
野川サダ子
塚本 清
酒井多加子
墓目 良雨
棚山 波朗
高野 清風
武田 孝子
武田 孝子
荒川 優子
山城やえ
大柳 篤子
荒川 優子

春雪の鞍馬山に鐘を撞きにけり
雪解水しぶく鞍馬の仁王門
肩を寄せ下る鞍馬の雪解道
牛若絵のケール切符雪の寺
春の雪鞍馬とよもす法鼓かな
千年の苔鮮らしき雪しづく
遮那王の背くらべ石春の雪
遮那王の石と背くらべ春立ちぬ
足立登美子
阿波谷和子
大橋 克己
石鍋みさ代
小川ひさこ
藤野 滯子
山口たけし
高嶋 良子

由岐神社

春風や由岐の狛犬子を抱き
中御門あや

貴船

春興の水占ひも吉と出し
水占に吉のつぎつぎ山笑ふ
寒明けの水に貴船の占を待つ
雪しづる水占のうすき文字
小川ひさこ
墓目 良雨
朝妻 力
生江 通子

貴船かな杉山檜山霽降る
 雪少し残して迅き貴船川
 浅春やぶぶ漬を食ぶ貴船茶屋
 春雪や結の社の恋の絵馬
 春の雪被る式部の恋の歌碑
 貴船佳し少しさびたる紅だすき
 ぶぶ漬や貴船路一と日雪しぐれ
 貴船山春雪しづく杉襖
 芽柳の瀬音になびく隠れ宿
 水占は吉と浮ぶや水温む
 如月の川音烈し貴船道
 舟形の磐にはだれの春の雪
 貴船川音を豊かに春立てり

上賀茂神社・社家町

手の平に神馬の息や春隣
 風花の舞ひこむ賀茂の焼餅屋
 色の濃き草餅を買ふ貴船みち
 床鳴らす神馬のひづめ春迎ふ
 風眩し橋を戸毎に社家の町
 まだ匂ひ残る末黒の神馬かな

棚山 波朗
 渡辺 陸郎
 児玉真知子
 山口たけし
 鶴田武子
 染谷 綾子
 奈良英子
 塚本 清
 沢 ふみ江
 高井美智子
 中野 智子
 泉田 政子
 野川サダ子

岡田万壽美
 墓目 良雨
 升本 栄子
 久重サヨ子
 中川 晴美
 武田 禅次

料峭やひもろぎの鋭き砂の山
 加茂川の堰ごとに群る都鳥
 立砂の箒目しるき芽木の宮
 冴返る立砂高き一の宮

深川 知子
 池野よしえ
 生江 通子
 中御門あや

その他

女人仏昼を灯して春の雪
 三極や貴船の川の堰の音
 寒明けの十指に受くる神の水
 (東京からの参加者。敬称略・順不動)
 奈良 英子
 高鴨アヤ子
 朝妻真知子

棚山波朗・墓目良雨・荒川優子・石鍋みさ代
 児玉真知子・沢ふみ江・武田禅次・武田孝子
 生江通子・奈良英子・升本栄子・塚本 清
 野川サダ子・高井美智子・足立登美子・藤野滯子
 皆川節子・染谷綾子

